

第1話 底が抜けた

本を溜めすぎると事件になる

「どうしてこうなってしまったのか 心に傷みを感じながら」——吉田拓郎の歌のフレーズが今の自分の気持ちにぴったりくる。心が傷むのは、わが蔵書の現状に、である。本が増え過ぎてしまったのだ。

本棚におさまった本とほぼ同量の本が、階段から廊下、本棚の前、仕事機の周辺などにはみだし、積み重なっている。おかげでちょっと移動するのも一苦労。床に散らばった本と本との間の、わずかな空間に片足を踏み入れないと前に進めない。そして前に進むと、積み重なった本の塔がばたばたと崩れ落ちる。

それでも空間を見つけられれば、まだいいほうだ。見つけられないと、本を踏み越えて移動することになる。本を踏むなんて、書評を生業とする者にとってあるまじき行為にちがいない。罰があたったのか、足が滑り、踏みつけた本のカバーが破れて「ああっ!」、本体を取り出した後の函を踏み壊し「ああっ!」、開いたページがぐしゃりと折れ曲がり「ああっ!」と、それは大変な騒ぎとなる。

最近では、探している本の見つかる確率が右肩下がりに悪くなったので、結局あるはずの本を図書館で借りてきたり、また本屋で買いなおすことも珍しくなくなった。危ないのは、そうして借りた本が、蔵書の波に吞まれ、“海底深く”に沈んでしまうことである。いつ、図書館から督促状が届くかと、びくびくして暮らすことになる。

理想の蔵書空間のはずが.....

大学に入学して、京都で1人暮らしを始めたとき、部屋は4畳半だった。それが8畳になり、10畳のマンションになり、途中、一軒家に1人で住んだこともあったが、これは例外で、徐々に読書環境を広げ、それにつれて、本の数も増えていった。

40代半ば(長期ローンの返済にはぎりぎりの年齢)にして一国一城の主となった。8年前に、21畳分の地下室つき建て売り住宅を購入したのである。

これで、しばらく蔵書の悩みはなくなると思った。誰もがうらやむ読書環境を手に入れた、これからは、本で苦しむこともない、とっていた(もっとも、ローン返済のため、大変な借金を背負うことになったのだが)。それが、このありさまである。

いくら本が多くても、本棚におさまっているかぎり、いつでも検索可能な、頼もしい“知

的助っ人”となる。それが、本棚からはみだし、床や階段に積み重なり始めたとともに、融通のきかない“邪魔者”になっていく。

そして、やがて抑えがきかなくなると、氾濫は“災害の域”にまで達する。今のところ、氾濫は地下に留まっているからいいようなものの、やがて1階部分を侵食し、それでも飽き足らず、階段を伝って2階にまでせり上がってくると、本当に「大惨事」となる。

“底抜け男”事件

5～6年前にこんな“事件”があった。都内の木造アパート2階に住む男性が、部屋に雑誌を大量に溜めこんで、床をぶちぬいたのである。これはニュースにもなったので、ご記憶の方もいるだろう。

男性は当時56歳だったから、現在の私の年齢に近い。彼は、抜けた床や大量の雑誌とともに1階へと落下。けれども、大したケガもなく、2時間後には無事救出されたという。

災難だったのは、1階に住んでいたご老人だ。ただ、このご老人も、事件が起こる前から天井（つまり2階の床）に異常を感じ、近くの警察署に相談に行っていたため危うく難を逃れた。想像すると、天井がミシミシと音をたて、いまにも落ちて来そうな気配があったのだろう。これは怖かったでしょうね。

この事件を報じた週刊誌の記事には、大量の雑誌が散乱した、ご老人の部屋の写真が載っていた。よくもこれだけの量を溜めこんだものだ。もっとも、件の男は、蔵書家というより、単なる無精者だったらしい。

ふつうの人にとって、この事件は、格好の酒の肴になったかもしれないが、私にとっては、とても笑えない話だった。私だけではない。同じ悩みを抱える仲間との会話で、話題がこのニュースに及ぶと、お互いに顔を見合わせ、「最初にニュースを聞いて、あんたのことかと思ったよ」「いや、キミこそ」という、苦笑まじりのやりとりになった。

その後、この“床抜き男”がどうなったのかわからない。家屋を損壊させ、ましてや他人に危害をあたえかねない状況を引き起こしたのだから、何らかの罪に問われたかもしれない。これで懲りればいいが、無精者ゆえ、またどこかで同じことを繰り返していないとも限らない。もっとも、床が抜けるほど本を溜め込む男の気持ちは、じっさいに床をぶち抜いてみないことにはわからないだろう。

—そんなことを考えながら、私は日々同様の事件が載っていないか、新聞の三面記事に目を凝らしている。

蔵書で床を抜いた著名人

「僕の父親は物書きだった。父の書斎は本でいっぱいだった。本棚からあふれた本は机の

上にも、床にも積まれていて、ある時床が抜けて部屋が傾いた。玄関にも本があふれていた」

この「父親」が誰のことか、文章を書いた「僕」が誰か、わかるだろうか。「物書き」の父親、とわざわざ断るのだから、どうやら「僕」は同業者ではない。ただ、こうして文章を発表しているところを見ると、なんらかの分野で名を成した人にも思われる。

答えをいうと、「父親」とは、哲学者でエッセイストだった串田孫一。「僕」は、串田和美。孫一の長男で、俳優・演出家として知られている。「ものすごく気になる」(「ヨムヨム 2010年7月号」)によれば、孫一の子供たちは、父親の書斎に足を踏み入れてはいけなかったということになっていたという。しかし、子供の常で、親の言いつけを破って、時々こっそり忍び込んだ。そこには、おびただしい数の本のほかに、「天体望遠鏡や、昆虫の標本や、気圧計のようなものや、顔が描いてある椰子の実」など、不思議なものがたくさん詰まっていたという。「まるで魔法使いの仕事場のようなようだった」と和美は書く。

そして、ついに書斎の床は抜けたのである。

私はこの書斎を写真で見たことがある。和美が書くように、本以外のものがたくさんあって、好きなものに囲まれた居心地のいい空間、という印象だった。いくら立派な本がたくさん並んでいても、本しか置かれていないとつまらない。絵の一枚も架かっていない、本の背文字で圧するような書斎を、私は味気ないと思う。

それにしても、子供時代に、床が抜けるほど本を溜め込んだ家に住んでいたというのは、長じて本が好きになるにせよ、嫌いになるにせよ、影響を受けないわけにはいかないだろう。

ちなみに、串田孫一は武蔵小金井市の住人。私が以前隣の小平市に住んでいた頃、最寄りの駅として中央線の武蔵小金井駅をよく利用していたので、孫一の家も見当がついていた。敬愛する物書きが、自分のうろつく町に住んでいると思うだけで、少し勇気が出たものだ。

もちろん、あの人も

日本の文学史上で、圧倒的な蔵書量を誇るのが、2010年に逝去した作家の井上ひさし。生前、彼の蔵書が故郷の山形県川西町に寄贈され、「遅筆堂文庫」という図書館まで建てられた。

寄贈するにあたり、家から運び出した段階で「13万冊あった」というのもすごい話。全編、本とのつきあい、そして格闘を語る『本の運命』(文春文庫)は、無類のおもしろさだが、なかでも蔵書について、「全部でいったい何冊あるのか、僕にもわからない。まあ、3万冊ぐらいかなあと考えてたんですね。それがあきつかけで、なんと13万冊あったということが判明する悲劇が起こる(笑)」とある。その「きつかけ」とは、前夫人との離婚

なのだが、その話は措いておく。

井上には、伊能忠敬や夏目漱石、樋口一葉、太宰治など、実在の人物をモデルにした小説や戯曲作品が多い。そのたび、その人物に関するありとあらゆる資料が必要になる。こうして本が自然に増えていく。

「本は書庫からも仕事部屋からも溢れ、廊下へ這い出し、家人たちの枕許まで窺い、インベーターみたいに家中を占拠していく。別棟に一本、書庫を建て増ししても追いつかない」と書いている。そして、ついにやってしまった。

本棚に収まらない本は床に積む。建て売りの6畳間を仕事部屋にしていた時の話だが、そのうち足の踏み場もなくなる。「部屋にいるとギギギギ、ギィー、ギギギギ、ギィーって音がする」ようになった。最初は「虫もいるのかな」と、気にもとめずにいた。それが「ある日、本を紙袋ひとつ分買ってきて、仕事部屋にポンと置いた。その瞬間に、床がズルズルッと傾いていって、ドッカーンと落ちたんですね。」

井上がすごいのは、驚くとともに「感動しました」と言っていることだ。

「大勢で力いっぱい押ししているのにびくともしない鉄の扉が、たった一本、ひょいと指の力が加われば開くという瞬間がある」。その瞬間を目撃できたことに「感動」したというのだから、これはやはり作家の「眼」だろう。

実は私にも似たような経験がある。東京・高円寺の木造アパート2階に住んでいた時のこと。明日引越しという晩に、あちこち散らばった本を段ボールに詰め込んで、それを一部屋にまとめて積み上げ、空いたスペースに蒲団も敷かず横になった。このとき同じく「ギギギギ、ギィー」という、虫の鳴くような微かな音をはっきり聞いたのだ。いま考えたら、あれは危なかった。あと一押しすれば床が抜ける、という警告だったにちがいない。

幸せそれとも不幸せ、床抜け回避劇

2006年に逝去したマンガ評論家の米澤嘉博も、名うての蔵書家だった。一般的には、コミケの創始者として知られている。米澤が溜めに溜めた、マンガや大衆文化に関する本や資料は、現在、明治大学の「米澤嘉博記念図書館」に保存整理され、誰でも閲覧できる。米澤家から図書館に搬入された本や資料は、段ボールにして約4500箱あったという。

私が、件の高円寺のアパートから運び出した段ボールの数は、本だけで50箱～60箱はあったと思う。引越しには、業者2人に加えて、友人2人が手伝いに来てくれたが、プロの業者が本の詰まった箱を運び出したあと、アパートの塀の前にへたりこんで、ぜいぜい息をついていたのを覚えている。軽い箱、少し重い箱、重い箱と、ローテーションで運ぶとそれほどでもないが、重い箱が50も60も続けば、プロでも音を上げることがわかった。一般の引越しでは、ちょっと異常な事態だろう。それが4500もあればどうなるか。

「米澤嘉博記念図書館」のホームページで、館長の間宮勇と、米澤夫人の英子が対談して

いる。英子夫人が語るには……。

「昔は限界を超えると引っ越していました(笑)。それこそヤドカリ生活と言っていました。私が知っている最初は井の頭線の池の上駅のそばにあったハルミ荘。これが大学生の時で、その後やはり池の上でアベ荘というところに引っ越しました。このアベ荘が割と広くて、ちょうどコミケットが本格的に始動した時だったので、当日に使う資料とかガムテープとかその他色々細かい備品を、最初は置いておくことができたのですが、徐々に本が浸食し……。アベ荘が手狭になって引っ越そうということになって、池の上駅のそばに次のアパートを借りたのですが、木造の2階でそこに本を3分の1運び込んだら、下の大家さんがいきなり現れて、「ドアが閉まらなくなった」と怒られました。結局、そこには1週間もいられず、鉄筋コンクリート製でないためだということで、不動産屋さんの負担で改めて引っ越しを(笑)」

この「ハルミ荘」事件は、米澤が生前に書いた文章で読んだことがある。米澤は「少年マガジン」や「少年ジャンプ」といった週刊マンガ誌のたぐいでも絶対に捨てない人で、すべてとっておく。しかも本棚を使わず、床から直積みで壁に沿って積み上げていく。「ハルミ荘」でも、そのやりかたでマンガ雑誌を積み上げ始めた。

天井近くまで積むと、本の重みで床が少し凹み、天井との間に隙間ができる。すると、その隙間にまた、雑誌を詰め込んでいく。そんな調子で、どんどん積んでいったところ、引っ越しの最中に大家に止められたという。

本の重みで隙間ができるというからすごい。この「ハルミ荘」にそのまま住んでいれば、いずれ床が抜けていたであろう。それを考えると、1週間もたたないうちに引っ越しを余儀なくされたことは、幸せだったのか不幸せだったのかわからなくなってくる。